

## ●地域づくり・まちづくりに関する講演会などの開催報告

### 1) 「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」 Part4

#### 講演会「ふるさとの『水と土と人』に思いを寄せて」 水土里ネット立梅用水

日 時：平成 18 年 7 月 6 日（木）13:30～16:30

場 所：松本大学 5 号館 523 講義室

#### 1. はじめに

こんにちは。

松本大学地域総合研究センター客員研究員でご案内役の玉井袈裟男です。「人にやる気・村に活気・地域づくり学習会」ということですが、このキャッチフレーズはもう 10 年ほど前に私が 70 歳前後に考えたキャッチフレーズです。今は、それから 10 数年たってとてもやる気も活気もなくなっちゃいました。そこで、年寄りとは良いもので、自分がやる気や活気がなくなったら、活気ややる気がある人をつれてくれば良いわけです。

私は昨年、三重県の立梅用水を見学しまして、その中心になっている高橋さんにお目にかかり、この方は、男盛り、やる気も活気もあります。話を聞いているうちに、農業、農業用水を中心に村づくりをしていらっしゃるので、多くの方に話を聞いていただきたいと思い講演をお願いしたところ、快く OK をいただきました。

こちらにいらっしゃるのが高橋幸照さんで、その向こうの若い方が西場信行君といって、信州大学の卒業生です。私が信州大学にいる頃、彼も学生だったですね。私の授業に一度も出たことがない。研究室に来て、酒を飲んで、帰っていた。授業に出たという記憶はありません。でもまあ、いっしょに村に行って、いろんなことを一緒にやってきた気心の知れた長い付き合いです。

彼はその頃酒を飲んで上手に酒を飲む技術を覚え、31 歳で三重県議会議員になりました。そして 48 歳で県会議長になり、今は 55 歳くらいになったかな。ですから、県議会の重鎮になっています。彼は農業系の議員ですから、農業とか環境とかを建前に政治活動をしています。自民党の幹事長になったら、大学につれてくるには具合が悪いのです。保守反動というのがあります。だけど、私が見ている限りは、彼は自由民主共産党のようです。良いものは良い、悪いものは悪いと、誠にはっきりしています。彼の選挙区の中に高橋さんの村があります。高橋さんの紹介は彼にやらしてもらおうと思います。

大事なことを忘れました。ここは私立大学なので、学長が大学の宣伝をしなければいけません。学長にあいさつをしていただきます。

みなさん、こんにちは。

僕は抜かされたかと思って心配しました。今日は幸せづくりの松本大学へようこそお越しくださいました。松本大学・松本大学松商短期大学部学長の中野和朗です。本日は、ありがとうございます。これであいさつというのは、終わりにすると一番きれいなのですが、ちょっと 2 分くらい、松本大学の話をしていただきます。

この松本大学は、今年できてから満 4 年を迎えました。この 3 月に初めての卒業生を送り出しました。おかげさまで 100 % に近い就職が決まりました。本当にありがたいと思います。

4年間は文部省の監視下にあるようなもので自由がありませんでしたが、今年から大学として、独自に活動できるということで、この4月から観光ホスピタリティ学科という、観光のプロを養成する場所はどこにもなかったのが、松本大学でやっていこうと、それが幸せづくりに結びつくとして、観光ホスピタリティ学科を立ち上げました。おかげさまで、たいへん期待が寄せられまして、4月に第一回生が入ってきました。だいたい今までは県内の学生が9割でした。ところが観光ホスピタリティ学科は県外から3割ほどの学生がきてくれました。いよいよ松本大学も全国区になるのかなという気がします。

来年の4月からは、更に幸せづくりをレベルアップしようと、人間健康学部という新しい学部を作ります。人間はなんと言っても、「ピンピンコロリ」健康で長寿を全うできる、それが最高の幸せと思っています。そのためには食と体の健康そしてスポーツで健康を維持する。そのための指導者を養成するというので、食のほうでは管理栄養士を養成するのが健康栄養学科です。最近熟年体育大学とか松本ではいろいろやっていますが、スポーツ健康というのは、指導者の養成が必要になってきます。その養成をするのが、スポーツ健康学科ということです。そういう形で、来年の4月からは更に一段と充実した松本大学ということで、皆さんの幸せづくりに貢献したいと思っています。松本大学は幸せづくり大学から、地域になくは困ってしまう、日用必需品大学、生活必需品大学を目指してがんばりたいと思います。どうぞこれからもよろしくお願いします。今日はごゆっくりお過ごしください。

玉井／講師の高橋さんの紹介を西場さんをお願いします。

## 2. 講演者の紹介

みなさん、こんにちは。

ご紹介いただきました西場信行です。約30年ほど前に信州大学を卒業いたしました。今日、ここに来ましたら、大学時代の友人がおりまして、昔の名前で呼ばれました。その頃のニックネームは「だいがろう」と呼ばれていまして、いろいろなお祭り騒ぎばかりしていた学生でございました。

今日は松本大学に来て、こんなごあいさつの機会をいただき、大変嬉しく思っています。先ほど学長さんに大学についていろいろとお話を伺い、松本大学の大ファンにさせていただきました。「幸せづくりの大学を目指す」というお話を聞き、改めて私も思い出しましたが、卒業の頃に玉井先生から「これだけは忘れるな」と教えてもらった言葉があります。それは「幸せ」についてです。

「幸せの言葉の定義は難しいが、幸せのありかだけははっきりしている。それは人と人の間、つまり人間関係にある」とのことでした。

こう教えていただいて、社会人の一歩を踏み出し、その後議員にさせていただきました。議員になると4年ごとに選挙があり、選挙戦を戦いますが、これはお互い候補者同士が戦うというよりも、有権者に向かっていかに自分をアピールするかがポイントです。つまりそれは戦いではなく、いかに人の心をつかむかという大仕事で、人間関係が肝心要であります。

地域政策をすすめるにおいても人間関係の基本ができていないと、どんなに高度な技術社会になっても、どんなに豊かな経済社会になっても、実感して幸せを感じられないことになります。改めて、幸せのありかの人間関係を心して、政治の仕事をつとめてゆきたいと思っています。卒業して30年経って、今ここに来て、松本大学の幸せづくりのための、人づくりのための大学という話を聞かせていただき、何か懐かしい思いもこみあげてきました。

私の選挙区である多気郡には旧勢和村という村があり、今年の1月に合併して新多気町になっています。その多気町の勢和地区であじさいを中心とした地域づくり、村おこしに取り組んでいる高橋さんのお話を楽しみに聞いていただきたいと思います。

高橋さんは村おこしに励みながら、本業の土地改良区の仕事をこなし、更に地元の消防団長も勤めるという、まっ言わばスーパーマン的な人です。この方のすごいところは何と言ってもやはり地域の人の心をしっかりとつかんでいて、高橋さんを中心にして、人の輪ができていきます。

村おこし地域おこしには、いろんなケースがあると思いますが、やはりそこにリーダー的人物がいるかどうかだと思います。そしてその人の周りに仲間ができてくるかどうか。それを後ろからじっと見守って支えていただく行政があるかどうか。このようなところについて、多気町の勢和の話をぜひ皆さんに聞いてほしいし、そして9月には現地に来ていただき、見ていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

もう一つ話を忘れていました。私は農政に関心を持っていますが、最近、土地改良区の事業はずいぶん変わってきました。圃場整備、区画整理などが大方終わってしまったのです。これからの土地改良は、いかにあるべきかということで、今、大きな転換期を迎えています。土地改良団体では、水、農地などを環境保全型で守っていく事業を始めようと検討してきました。全国に先駆けて、この立梅用水がそのことを手がけたのです。農業用水をして、元気な村づくりと環境保全型の農業を実践した、まさに全国の土地改良団体が注目しているモデル的な改良区であると、ご紹介申し上げます。本日はどうもありがとうございます。

### 3. 講演会

テーマ	「地域資源の保全・活用のためのネットワーク作りー水土里ネット立梅用水ー」
講師	三重県多気郡多気町水土里ネット立梅用水 事務局長 高橋幸照 氏

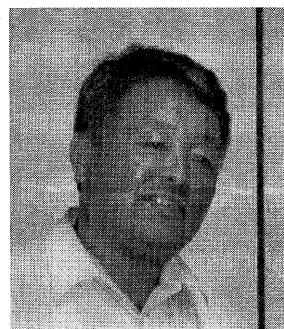
こんにちは。

三重県の多気町から参りました。今年合併したばかりです。旧勢和村というところで全長 30 キロもある農業用水の立梅用水を管理しているのが、私の仕事です。中山間地の農業、農村部ですが、私達だけに与えられた大切な資源だ、大切に守り伝えて行こうという考えに立ちまして、ちょうど 12 年。地域の人たちと土地改良区、行政の方々協働しながら地域資源の保全と活用という色々な活動をすすめています。

私、大勢の方の前でこのようなお話をするのは初めてです。特に今日は、県政の立場でいつも大活躍いただいている地元の西場先生や、地元の町からも普段深い付き合いを頂いて、私を知っている方がたくさん応援隊ということで、来ていただいています。こういう活動には、本音の本音があります。そういうところも良く知っている方が、聞いているということで、そういう意味でも、話しづらいです。緊張がかなりあります。

皆さん、私たちは農村の資源を大切に守っていきたいという思いをもって活動していますが、今年も 2 月 19 日に、12 年目のアジサイを農地の周辺や立梅用水沿いに植えました。150 人程のボランティアに出いただきました。この活動をずっとやってきました。これを振り返り地域活動を通じて、何を育んできたか。それは、やはり人と人のつながりなんだと思っています。

ということで、今日は 90 分というお時間を頂き、10 分程度のビデオと、スライドで地域の活動をご紹介申し上げたいと思います。



\*\*\* ビデオ上映 \*\*\*

《立梅用水の様子》

アナウンス／全長 30 km にも及ぶ立梅用水は、様々な経緯で、利便性が向上する一方、農家や住民から水があって当たり前という意識を持たされるようになりました。そのため立梅用水土地改良区

は、先人から受け継いだ用水を地域全体の資源として、再び見直すための活動を平成6年から始めています。

#### 《あじさい一万本運動の様子》

あじさいいっぱい運動は、水路の周辺一帯にあじさいを植え、美しい景観を整備して、地域用水機能向上を図る取り組みです。この活動の特徴は、土地改良区が地域の住民や農家に呼びかけ、住民参加の活動を目指したところです。

高橋／社会の中で、どういうふうに存続していくのか。そういうことを考えたとき、地域の人たちと一体になって存続していく土地改良区ということを考えていきました。そのためには、やはり土地改良区がこれからやろうとしている、たとえば、灌漑のみならず、多面的な機能を発揮するという、具体的な内容ですね。土地改良区が方針を定め、地域住民に理解をしていただく、こういうことが大事だと思います。

アナウンス／庭先や休耕田で大事に育てるあじさいの里親として住民に協力してもらい、徐々に花を増やしていきました。地域にあじさいの花が増えるとともに、住民の理解の輪も少しずつ広がり、数名から始まったあじさいの里親は、今では、100名以上になっています。

地域住民／実際自分でやってみて、苗木でも挿し木でも育ててくると、非常に楽しみですね。

アナウンス／地域の住民があじさいの花に愛着を持ち、土地改良区の活動に理解を深め、積極的に活動に参加しています。

里親が育てたあじさいを住民自らの手によって、農地の周辺に毎年植えていきます。

あじさいの苗を自ら育て植える。住民が積極的に参加できる、地域全体の活動になった「あじさいいっぱい運動」。

地域の財産である用水を再認識する取り組みは、美しい景観と、地域の活性化をもたらしました。

こうした景観の保全活動を契機に、土地改良区と住民とが一体になった様々な地域づくりへの取り組みが始まりました。

#### 《農村のビオトープの様子》

休耕田を有効利用し、水辺の生態系を復元した農村のビオトープもその一つです。農林水産省と文部科学省が支援する「あぜ道とせせらぎづくり」推進事業を活用し、子どもたちが農業、農村に親しむ場を提供しています。美しい花をつけるホテイアオイや、めだかなどの日常の管理は、土地改良区と住民などによるボランティアグループにはてい倶楽部が行います。年に数回行う、観察会などのイベントでは多くの住民が運営を支えています。

田んぼの周囲でメダカやタガメなど、水辺の生き物と触れ合う貴重な体験を子どもたちに提供する。地域の資源を管理する機能に加え、地域に貢献していくことは、土地改良区の果たす新たな役割でもあるのです。

土地改良区と地域住民が一体となって開催する立梅用水の様々なイベント。

現代も残る用水路を作った当時の手掘りのトンネルを体験させるなど、一つ一つの取り組みが、人々の用水への理解へとつながっていきます。

地域の財産である立梅用水の価値を再認識した住民たちは、土地改良区とともに立梅用水の光彩をより多くの人々に広めようとしています。

#### 《劇の様子》

村の劇団「はてい葵」は立梅用水の価値や大切さを訴えるため、延べ247000人もの労働力をかけ、1823年に完成した立梅用水の建設の苦労を劇にして発表しています。

立梅用水土地改良区は用水への知識を高める様々な試みを通じて、住民の理解の下に新しい地域づくりに取り組んでいます。地域づくりのベースになっているのは、土地改良区が持っている資源、水と土と人です。こうした資源の生かした方を地域住民とともに模索していくことが、地域に理解される土地改良区の実現のために重要なのです。

## 三重県多気郡多気町勢和地区の概要

次に、スライドで地域の活動をご紹介します。

今日のタイトルは「地域資源の保全・活用のためのネットワークづくり」ということです。私たちの水土里(みどり)ネットは地域の人たちと一体になって進めておりますのが、農地、水を保全すること、機能を増進すること、活用することを進めています。

三重県多気郡多気町勢和地区、ちょうど三重県のへそだとよくいわれます。ちょうど中心にあります。今年1月に合併しました。この多気町にはシャープの液晶の大きな工場があります。もともとは農業を基幹産業として現在に至っています。隣は松坂牛で有名な松阪市です。そして大台町です。こちらは伊勢茶ですね。お茶の生産が大変盛んなところです。

私たちの地域の住んでいるところには、一級河川の櫛田川が流れています。櫛田川の水を引水して、山と平地の間を流れて、この村々の田んぼに灌漑しているのが、立梅用水です。総土地面積が53.58平方キロ、人口が5400人。7割が山林、3割が平地というまったくの中山間地です。農地は530ヘクタール。この櫛田川の流れは、県立公園にも指定され景観の美しい一級河川です。総世帯数が1600戸。農家戸数が750戸ということで、半分以上は非農家ということです。二種兼業率が高く96%。ほとんどが松坂や伊勢方面に勤めながら、農業をしているという形態です。

私どもの立梅用水は、大変歴史ある用水ですが、それを忘れさせてきた原因になっているのも、兼業という背景があります。しかし、兼業が地域農業を支えているというのも事実です。

主な農産物は、米、お茶、白菜、キャベツ、白ねぎ。最近はこの白ねぎをたくさん作っています。転作としての麦、大豆。こういうものを産物として作っています。

私たちの地域の歴史、文化に何があるのかと言いますと、丹生大師です。「丹」という字は、水銀を意味しています。今から1300年ほど前、奈良時代、奈良東大寺大仏様の金メッキの剥離材に、この地の水銀を大量に使ったということで、奈良、平安時代を中心に大変栄えたところでございます。弘法大師、空海も訪ねまして、この丹生大師という云われは、空海が七堂伽藍という、7つの伽藍を建立したことからはじまります。まさしく弘法大師ゆかりの地であるといえます。

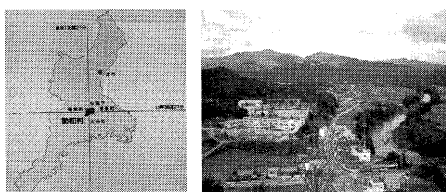
これは昭和40年代まで掘っていた、水銀鉱の跡です。(スライド2)

平成6年には、こうした弘法大師ゆかりの地として丹生に、観光客を目当てとした「ふれあいの館」という交流施設が建設されることになりました。そして地域農業の振興を目的に、地元でとれた野菜の販売をはじめることが計画されました。

この建物の建設は村でしたが、運営は、地元丹生地区に任せられるということになり、地元区長としては、丹生大師だけでは集客が図れないという思いがあり、あじさいでも植え、地域の目玉にしようとしたのが、この丹生地区でございます。これが今日ご紹介申し上げます、地域コミュニティを再生していく運動の「あじさいいっぱい運動」につながります。

(スライド1)

地域資源の保全・活用のためのネットワークづくり  
—水土里ネット立梅用水—



三重県多気郡多気町勢和地域の概要

- ・総土地面積53.58平方km・人口5400人・7割山林・3割平地・農地530ha
- ・櫛田川の流れは香取峡県立公園
- ・総世帯数1,600戸・農家戸数750戸・2種兼業農家率96%
- ・主な農産物・米・お茶・白菜・キャベツ・白ネギ・麦・大豆

(スライド2)

丹生大師の里(弘法大師・水銀)



交流施設「ふれあいの館」平成6年完成(丹生地区)  
地域ボランティアによる「あじさい1万本運動」発祥地

ちょっとこの「丹生」という地区名を覚えてください。

## 立梅用水の誕生

立梅用水は今年2月、疎水百選にも選ばれましたが、今から200年ほど前に丹生の地の西村彦左衛門が、貧しい農民の暮らしをみかね、用水建設と新田開発を発起し、自分の私財をなげうって建設に苦勞したといわれております。この西村彦左衛門翁は、まさしく私どもの地域の水と土の先駆者でございます。どこの地域にも共通して農業用施設の建設には、こういう先人の歴史がございますが、私たちの地域では、この水と土の先駆者は、西村彦左衛門です。現在では、地域づくりの名前にも「彦左衛門」という名前が頻繁に使われています。ちょっと、この彦左衛門という名前も覚えてください。

それから、文化財にも指定されている「素掘りのトンネル」です。このトンネルは、現在も3ヶ所そのまま残され、一ヶ所の全長は70メートルほどです。注目すべきは、このトンネルの岩にノミのあとが点々と残されているところです。先人が非常に苦勞して掘ったノミのあとです。そのことわざが「岩一升米一升」ということで、この硬い岩を一升桝一杯掘ると、当時貴重な米が一升桝一杯もらえたという苦勞話が現在に伝えられています。

昔のままの構造で、現在も現役で使用されています。年に一度だけ、この中をボートで下ってみることができますが、それがあじさい祭りのときの立梅用水ボート下りです。

これは、櫛田川に設置された4代目の井堰で、現在も使用しております。西村彦左衛門さんが建設されたのは、これから1600mほど上流に堰が設置されましたが、櫛田川は、暴れん坊の川としても有名で、降雨時などは増水し、初代、2代、3代と洪水で流されました。

皆さんここに、滑り台のようなものがありますが、これはなんだと思いますか？

これは「魚道」だろうとよく云われますが、実は「魚道」はこちら右岸にございまして、これは「流木路」なんです。櫛田川の源流は、奈良県境まで行きますが、この間に飯南町、飯高町という町がございまして、昔から林業の盛んなところなんです。その木材を櫛田川に流して伊勢湾、松阪の海に運んだ訳ですが、松阪市は、松阪牛も有名ですが、現在でも日本一製材所が多いのです。そのくらい林業が盛んな町でしたので、この流木路を使い材木を下流に流したのです。このような構造物が現在も残されているのも非常に珍しい。

すべてが石積みの構造になっていて、河川の中の岩を砕いて固定堰に使用したと云われ、全長65メートル、高さ5メートルほどの固定堰です。

この4代目の堰ができたのは、大正10年のことです。もう80年以上この堰を使っていますが、これも文化財の指定がされています。それからもうひとつ大きな特徴は、大正10年から中部電力と協定して、農業用水の間は灌漑用として、灌漑期以外は発電用として使うという多目的農業用施設で、これもこの井堰と立梅用水の大きな特色です。地域の電気を初めて灯してくれたのが、この農業用水の利水で得られる発電。これを大正10年からは、ずっと灌漑と発電を目的に続けられています。

立梅用水は延長30キロありまして、山と平地の間をずっと縫うように流れています。本当に先人たちは、こんな水路をよく作ったものだのと、今になって思います。なるべく耕地を広く取ろう



という考えのもと、山と平地の間を流れていきます。この上流部では、1秒間に4トンの水が流れています。

### 立梅用水の近代化—近代化がもたらしたもの—

この江戸時代の立梅用水路ですが、昭和26年から46年にかけて、素掘りの水路で、水の利用効率が悪いという理由から、約半分を20年間かけて、コンクリートの水路にしています。私も幼い頃、この水路がコンクリートに変わっていく様子を見ていました。その後、昭和63年から平成6年にかけて第2次の灌漑排水事業として、残りの江戸時代の水路をコンクリートの水路に変えていきました。

私が小さい頃には、この水路の中で、色々な生き物を取って遊んだ思い出があります。農業用水というのは、雨降りが続くとよく通水が止まるんです。そうすると鮎とか、うなぎとか、色々な生き物がその中にいてですね、タモを持ってそれを追いかけてバケツいっぱいにとって家に持って帰ると、おやじが喜んでくれました。「よく取ってきたな」と。それが嬉しくて、早くこの用水が止まらないかなとよく思っていました。

私は、昭和63年から平成6年にかけてこの第2次の灌漑排水事業に携わらせていただきました。延々と10キロ以上わたってコンクリートの完璧な用水が完成して行きました。工事中の用水を巡視していて、小さい頃に遊んだ思い出が思い出されました。確かにこの工事は、農業者にとっては水の有効利用であり、維持管理の軽減という大事な事業なのですが、何か景色も画一的になり、これでは生き物も住めないとさびしい思いがしました。

そして、遅れていました圃場整備事業が村内一円に行われました。村中の地形が変わるほど、一斉に圃場整備が行われました。ここには用水とはまた違ったメダカやタガメといった、色々な生き物がいて、そういうものを取って遊んだ思い出があります。しかし、これも農家にとってはやらなくてはならない事業として進めていきました。

そのときに、兼業農家の若者と話をする機会がありました。兼業農家の若者に立梅用水が、とうとう30キロ全線、江戸時代の土の水路からコンクリート水路に生まれ変わるんだと、あるいは圃場整備ができて、営農が楽になるんだという話をさせていただいたんです。そのとき、その兼業農家の若者が言うのには、「私は立梅用水がどこで水を取って、どんな風に流れて、自分の田んぼに来ているのか、知らない」というのです。あるいは、私たちの地域では、昔から農地や用水を守るために「出会」という共同作業の制度で、草刈をしたりとか、水路の土砂を上げたりしていますが、圃場整備ができると、そういう「出会」に行かなくていいようになるから便利なんだと言いました。

私は、この兼業農家の若者の話を改良区の役員会に諮りました。ところが役員はそのことをすでによく知っていました。そんな30キロ延々と流れてくる話のことではないんだ。自分の住んでいる地域の立梅用水ですら、どこをどんなに流れているのか知らないんだ。そんな若者ばかりだというのです。

土地改良事業ではいろいろと役員が、組合員や地権者の同意得て、又、莫大な債務責任を負って事業を進めるんですね。みんなが便利になるためだと色々苦労しているんですね。

これでは、まるで水道の蛇口と一緒にじゃないか、4月になれば蛇口をひねって水が出て当たり前



だというふうになっているのではないかと。彦左衛門さんが自分の私財を投げ売ってまで造り上げ、多くの先人の苦勞のもとに現在に伝えられてきたものを。

ましてや「出会」という制度は、昔からみんなの助け合いの中で地域を守るという農村にはなくてはならない互助制度。「出会」に行かなくていいから便利なんだという考え方が、本当にいいのか……。その当時、用水へのごみの投棄などもされていました。

整備されて便利になる一方で、もっともっと水や土を大事にしていく心と資源を大事にするという意識を高め合わないといけないとうことが話し合われました。

要するにこの当時、兼業という時代背景もあって農地や農業用施設に対する「関心の薄れ」があったということなのです。

では、何をすれば良いのか。なかなかわからなかった。初めは文化祭で、ビデオを作ったりして、こんな歴史があるとか、ゴミの投棄をしないようにとか、いろいろPRもしたのですが、なかなかみんなが農地や農業用施設を大切にして行こうとする意欲的な保全意識を高めることはできませんでした。

### ふるさと水と土保全活動－水や土の保全から生まれるもの－

平成5年から始まったのが、地域の人々と水土里ネット、行政の協働により水や土を保全すること、そして地域用水機能を増進すること、地域資源を子供教育に活用することです。それを只今から、ご紹介申し上げたいと思います。

まずは、平成5年から水や土の保全を目的とする「ふるさと水と土保全活動」がスタートしました。先程、紹介致しました丹生地区の区長さんが、「丹生は弘法大師のゆかりの地で観光地なんです、もう一つ何か目玉になるものを作っていきたい」と、「私の考えでは、大師の里、周辺の農地や農業用施設の周りにあじさいを植えたらどうか」と区長さんがおっしゃいました。私はこの言葉を聞いたときに、すごく感銘して、立梅用水も工事でコンクリートがむき出しになった状態でした。用水沿いにも是非、あじさいを植えてくださいと申し上げました。区長さんは、「ボランティアでやってみたいのだ」と、「苗木を買ってきて、機械的に植えるのではなく、皆さんの協力のもとにボランティア活動としてやりたいんだ」と、しかも「何年かかっても良いから、目標は1万本植えてみたいんだ」ということをおっしゃられました。

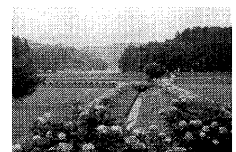
さっそく活動が始まりました。区長の声かけのもと、まずは女性のグループ50人ほどのボランティアが誕生しました。このボランティアグループは「あじさい倶楽部」と名づけられました。6月に各家庭でハッポースチロールの箱にあじさいの挿し木をし、翌年2月にこれを休耕田の移植し、1年間で大きくして、それを圃場整備された農道や排水路のり面、立梅用水沿いに植えているという共同作業を行いました。あじさいと言いますとあじさい寺のようにあじさいの花だけを強調されがちですが、私達の地域では広く農村景観とマッチした「あじさいの里づくり」を目指しました。もちろん私の土地改良区もこの活動に積極的に参加を致しました。

子ども会が参加したり、小学校の卒業記念で植栽したり、色々な人の協力も得ながらあじさいを植えていきました。

だんだんと成長してくると、剪定とか、草刈が大変になります。その作業は、女性では大変なので男性も応援しようということになり、現在は男性50人ほどのボランティアが活動を支援してく

(スライド5)

#### 「ふるさと水と土」保全活動の始まり(平成5年～)



#### あじさい一万本運動(丹生地区)



れています。このようにして、丹生地区であじさいの1万本運動が確実に毎年実行されて行きました。そしてとうとう平成13年に1万本を達成しました。エリア的には30町歩くらいになります。周辺の排水路、用水路沿い、農道などに1万本のあじさいが咲き誇るようになりました。

### あじさいいっぱい運動

この活動は、だんだんと発展して行きました。丹生地区にできたものですが、勢和地区は10集落あり、それぞれ残りの9地区でもできるのではないかなということになり全村運動として「あじさいいっぱい運動」が始まりました。しかも、それぞれの区長がオブザーバーのような形で支援するという、この運動は一つの住民自治活動的なものとして生まれした。

全区長さんに支援をしていただき、それぞれのボランティアで構成した「あじさい会運動協議会」ができました。この写真は古江地区の取り組みで休耕田を使った育苗です。これは、片野地区ですが、県道沿いのあじさいの下草を刈っている様子です。この写真は、立梅用水がおとし「東海美の里百選」に選ばれ、タイトルは「あじさいの咲く立梅用水」ということです。用水沿いには毎年継続して植えています。今年の2月19日には12年目のあじさいを植えました。平成20年までには、日本一長い、あじさいの咲く農業用水の小径を作ろうと頑張っています。

この活動こそ、用水や農地を大切にするという気持ちを育むことにつながっていったと思います。何が良かったのかというと、活動を通じて人と人とのコミュニティというものが生まれるのです。農家の方だけがやっているのではなく、農家の方も非農家の方も、子どももお年よりも、地域ぐるみであじさいいっぱい運動を持続的にやって行く中で、「来年はこうしよう、ああしよう」という話し合いがされました。だんだんと地域に訪れる人も増えていきました。新聞社に勢和村では、水田脇や農業用水の脇にあじさいがたくさん咲いていると記事を書いていただくと、ますます人が訪れるようになります。

地域としてはやりがいが出てきて、「来年はもうちょっとここをこうしよう」という話し合いが積み重なって、コミュニティが生まれ、結果的に農地や農業用施設にも関心呼び戻すことができたと思います。

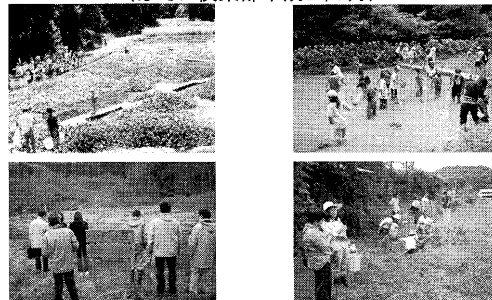
このあじさいいっぱい運動を契機に私たちの地域では、色々なボランティア活動が生まれました。

### 農村のビオトープづくり

休耕田を活用した生態系の保全として「農村のビオトープづくり」を始めました。農地が昭和40年代以降の転作制度が進められる中、荒れてくる農地が増えてきています。これは今でも大きな問題です。耕作条件の悪い農地ほど、荒れてきています。ここもあじさいを周りに植えてきましたが、隣接農地がこんなに荒れていては困るという思いがありました。そこで米作りをしても何も面白くないし、施設の改良工事で犠牲になり、いなくなったメダカや生き物のための広場が出来ないかと相談していたところ「ほてい倶楽部」というボランティアグループが誕生しました。現在、私が代表を務めています。役場の方とか、改良区の役員さん方、約40名で構成しています。荒れた休耕田には木も生えていましたこれを復田しました。ここにはホテイアオイを植えています。そのホテイアオイとメダカ

(スライド6)

#### 休耕田を活用した「農村のビオトープ」づくり (ほてい倶楽部平成8年5月)



・生態系の保全広場や子ども達の環境教育の場として活用  
・三重県環境保全事業団との連携 ・平成12年4月...三重県環境功労賞受賞

の生態がうまくマッチして、メダカがたくさん増えます。そうすると、今までいなかったタガメ、ゲンゴロウ、ミズカマキリとか、絶滅危惧種に指定されているような色々な生き物がここにわいてきました。荒れた状態では何も生き物もいなかったのですが、水田機能を持たせるといろいろな生き物がわいてきました。

現在では、地元の子どもたちが、総合学習の一環として頻繁にここを利用して頂いております。休日ともなれば親子連れで生き物と遊ぶ姿がよく見られます。

このことそのものは経済効果を生みませんが、やはり荒らしておくくらいなら、子どもの教育の場として活用していただくことは、大きな意義があると思います。他にもヘイケボタルの里作りなども進めています。これらの活動も「ふるさと水と土の保全活動」の一環として現在も続けています。

### もう一つの面白い取り組み—思いがけない副産物—

村の色々な職業を持った方々が、劇団を作り演劇をやり始めました。先程もビデオで見ていただきましたが、立梅用水建設にかかる西村彦左衛門の苦労の物語を「わしらの村に水が来た」という劇にしました。平成8年11月に第1回の初演公演をしました。団長の中西真喜子さんが夜昼公演をするといったのです。会場の勢和中学校の体育館には700人くらい入ります。みんながそんな夜昼やらなくても、こんな素人劇団にお客さんは来ないといったのです。ところが、夜昼とも体育館は満席になって。スライド7の舞台上に白く点々がありますが、なんだと思います？ おひねりなんです。おひねりが飛んで、飛んで劇が途中ストップするくらいでした。どうしてこんなにこの劇が受けたか。実は、この会場の皆さんは、役者さんの普段の生活ぶりを知っているのです。あのクリーニング屋さん、学校の先生が、区長さんが、普段あんな仕事をしている人たちがどんな劇をするのかなというところに、親しみがあって、夜昼満杯になっておひねりが飛んだのです。用水が完成して初めて村に水がきた瞬間、役者さんとお客さんとのコミュニティーがこの中で生まれていたのです。

そしてこの劇を通じて、用水建設にはこんな苦労があって、現在に繋がれて来たかがよく伝わって、多くの人々に感動を与えることができました。

私も劇に参加しています。実は百姓役で登場させていただきました。最初は役者をするのはかなわないと思いました。こんなことはやったこともないし、団長が「あんたのところの事務所の話だから絶対出ないといけない」といわれ、無理矢理引っ張られました。それで一緒にやらせていただきました。

今まで、題材は地域の史実に基づき演劇を第5部作までやってきました。第4部作では立梅用水開設180周年を記念して立梅用水明治、大正編を行いました。彦左衛門の物語は江戸時代の話ですが、私どもは昔、紀州藩に属していました。明治になって制度が変わり、廃藩置県の以降、こういう井堰など農業用施設は民賦の一部ということで、維持管理を全部農家が負担しなければならなくなりました。それ以降、暴れん坊の櫛田川の立梅用水堰が洪水により、2代3代と壊されて、現在の立梅井堰が大正10年に出来上がります。この立梅井堰再建にかかる苦労の物語を明治大正編としてやりました。そのとき大変好評いただきました。私も同じく村の百姓役をさせて頂きました。最近はずっかり病み付きになってしまって、劇を通じて私の人生観も変わったなと思っています。このようにして仲間に加わらせていただいて、演劇をやらせていただいています。これも「ふるさと水と土の保全活動」の一環です。

(スライド7)

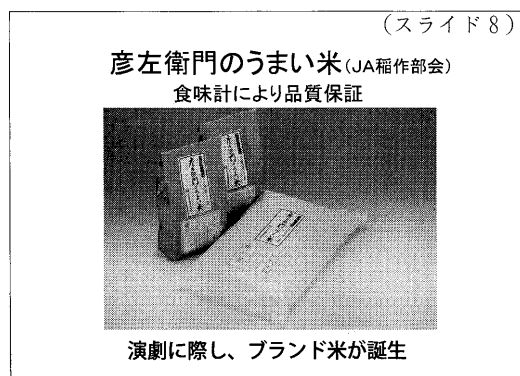
劇団「ほてい葵」(平成8年11月)  
テーマ:「ふるさとの水と土」を大切に!  
わしらの村に水がきた!...立梅用水物語



村民手づくりの演劇が多の人びとに感動を与える

J Aの稲作部隊は、これは米作りの話なんだから絶対村の米をアピールしない手はないということを言いました。そしてこの劇に来たお客を対象に、あの日本一うまいと言われる魚沼産の米と、勢和の米と握り飯にしてどちらがうまいかとアンケートをとりました。そしたら、お客さんはみんな、どちらがどちらかわからないといいました。それなら日本一の魚沼産に引けはとらないということになりまして、「彦左衛門」という名前をつけて、「彦左衛門のうまい米」として、販売することになりました。今も交流施設の「ふれあいの館」で勢和地域のブランド米として贈答品としてよく売れています。

演劇に際して、こんなふうにブランド米が誕生したという話ですが、地域づくりを考えてみると、こういうところにもちょっと名前を取るだけで、いろんな地域の特性なども表現できます。この意味でもこの彦左衛門さんは、現代にも生きて活躍いただいている思いです。



### 勢和村「ふるさと水と土」保全対策協議会設立

このようにふるさとの水や土を保全する活動は、私たちの地域ではいろいろ形を変えて、いろんなジャンルで活発になってきました。そうすると、どうしても活動経費が必要ですので、村に「ふるさと水と土の保全対策協議会」を設立していただき、そちらから活動費をいただけるようになりました。

立梅用水土地改良区の定款にも「ふるさと水と土の保全活動」を明記しました。これは、地域の人々と土地改良区の協働という事に対しては、はじめは批判や不理解があったからです。地元農家にしてみれば、ああいう水路や農道沿いにあじさいを植えると、草刈の管理の邪魔になるだろう。どうしてあんなところにあじさいを植えるんだろうという批判がありました。それから土地改良区が地域の人々と一緒に活動をする、土地改良区はよほど暇でそんなことをしているだろう。改良区は、本来水の管理だけをしていればよいのに余分なことをしている。といった厳しい批判がありました。確かにあじさいを植えるということは、草刈の手間も時間も経費も余分にかかりますが、そうではないんだと。あじさい一本を農地や農業用施設の周辺にみんなで植えるという価値はどういうことなんだ。あじさいの里づくりという協働の中で、環境を整備していくということの価値は、別のところにあるんだということです。農家も非農家も土地改良区も協働する中でいろいろと農地や農業用施設にも関心を高めて頂けるんだと、そこがなかなか理解して頂けないところでした。

それから暇だろうといわれると、暇どころか、土地改良区としては逆に大変忙しくなります。ボランティア活動というのは、非常にあいまいな部分がありまして、私どもの用水路沿いにあじさいを植えるとなると、共同でやっていただく作業については、確実にやっていただきたいと思いますが、なかなかそういうふうになりませんし、ボランティアのみなさんと会議一つやるにしても、段取りは改良区がしなければなりません。実際は忙しいのが現実です。

それから土地改良区として余分なことをしているという面では、平成13年に土地改良法の改正がございまして、「環境との調和への配慮」、「地域住民との調整」というようなことが言われるようになりました。このことを受けて平成14年から、土地改良区「21世紀創造運動」が、土地改良区の役割を見つめ直しましょう、心や豊かなふるさとを創りましょうといったスローガンを掲げ全国運動論としてスタート致しました。このことを私たちの土地改良区総代会で紹介したときです。なんだ、私たちの地域は10年も前からやってきたことではないかと、ましてやこれからの時代は、環境に配慮した取り組みが必要な時代になっているということが、ようやく理解されまし

た。維持管理だけしていればよいという時代は終わったんだ。土地改良区としてこれからも続けて行かなければならない活動なんだと。

何よりも定款に明記した重要性は、農家のみならず地域の人々と土地改良区の協働なんだというところですよ。農地、水は、どうしても農家だけのもの、農家だけで守らなければならないという固定観念があります。そうではないんだ。私たちの地域は農家も非農家も住んでいるところに農業用水が流れたりして何らかの恩恵を享受しているのです。ですから農家の方も非農家の方も感心を持って協働していただくということが大事なことなんだということを強調したかったわけです。

その定款に明記して以降、むらの水や土に関する子ども達への学習会が頻繁に行なうように致しました。今までは、学校から頼まれて、受身で子どもたちに地域の農業とか、立梅用水のことを紹介していましたが、それではいけないと。子どもたちは私たち地域の将来を約束してくれる大事な存在なんだから、もっともっと積極的に伝えていかなければならないということで、今では事業計画を立て年間40回以上行なうようになりました。三重県にも登録をして、「あぜ道とせせらぎづくり」という文部科学省と農林水産省の共同事業も利用しています。登録制の事業ですが、これにも三重県第一号の登録を済ませ積極的に事業を進めています。

## 地域の教育力

小学校4年生に「地域を学ぶ」という授業があります。私がこの授業の冒頭で「勢和の立梅用水とか田んぼを見て、何を思いますか。何でもいから答えてください。」というと、まず子どもたちは西村彦左衛門という名前を覚えてくれました。それからあじさい。それからメダカと答えてくれます。なぜこういうことを言うてくれるのか考えてみました。それは、地域の多くの人々が「あじさいいっぱい運動」をやっている。自分たちもあじさいをお父さんやお母さんといっしょに植えたとか、あじさい祭りに行ったとか、あるいは演劇を見に行ったとか、自分たちも寸劇で彦左衛門の演劇をしたとか、ビオトープでメダカをすくったとか、そういう地域の人々がやっている普段の活動に接し、体感として伝わっているのではないかと。だとすれば、これはすばらしい地域の教育力だと思います。実はこの子どもたちの親が、立梅用水がどこで水を取り、どこをどのように流れ自分の田に来ているのか良く知らないのです。ですから、その親の親たちが、伝えていなかったんだらうと思います。将来を約束してくれる大事な子ども達ですから、私たち土地改良区は地域の子供たちに地域農業のことを伝えていく責任があると思っています。ですから年間40回以上もしています。私たちだけではできませんので、農家やいろいろなボランティアの方にご協力をいただく中でやっています。

「彦左衛門のあじさいまつり」ということで平成9年6月からあじさい祭りを行なってきました。すこし気の早い人がいまして、まだ幼木だったのですが、祭りをしようということにな

(スライド9)

### 地域の学習会(立梅用水土地改良区)

約 束

テーマ・「ふるさとの水と土」を大切に



地域の人びとの活動＝地域の教育力

(スライド10)

### 彦左衛門のあじさいまつり(平成9年6月～)

主催: 勢和村観光協会 協力: 各種ボランティア(500名)

テーマ・「ふるさとの水と土」に感謝して



農地や農業用施設がイベントの舞台

りました。とにかくまわりは農業用施設の立梅用水と田んぼしかありません。そんなところで何ができるのか、みんなで協議して考えたのが、この立梅用水を使ったボート下りです。ここをずっと下っていくと、初めに紹介しました素掘りのトンネルの中をくぐっていくのです。他にも子どもたちが彦左衛門の寸劇をすとか、田んぼの上でコンサートをすとか、綱引きをすとか、マスつりをすとか、まさしく農地や農業施設がイベントの舞台になっていて、支えているのは地域ボランティアの方、約500人くらいが出てやっていただいています。今年でちょうど10年になります。その様子を三重県が作成した行政ウォッチングという番組に放送されて間もないのですが、ちょっとご覧ください。

\*\*\*ビデオ上映\*\*\*

アナウンス／平成ウォッチングの時間です。今週はふるさとづくり三重をお届けします。今回ご紹介するのは、6月11日に多気町で行われた「第10回大地の里 彦左衛門のあじさい祭り」と、この地域の人たちの農村社会復興への取り組みです。

6月あじさいの咲き誇るこの季節、多気町丹生地区で行われる「大地の里 彦左衛門あじさい祭り」は今年で10回目になります。

地域の人たちが一つになって「ふるさとの水と土に感謝して」をテーマにスタートしたこの祭り。

今年はいいにくの雨天にもかかわらず、たくさんの方が農村の一日を楽しみました。

地域に流れる農業用水「立梅用水」や周辺の農地を利用したいろいろなアトラクションは、年々盛り上がりを見せ、多気町の旧勢和村地域の代名詞といえるイベントに成長しました。

立梅用水は今年2月疎水百選に選ばれました。

松阪市飯南町から右へ櫛田川から取水された水は、波多瀬で800キロワットの電力を発電し、およそ470ヘクタールの田畑に潤いを届けます。発電、灌漑のみならず、立梅用水はその景観から、地域に環境意識や安らぎをもたらしています。

江戸時代、丹生出身の西村彦左衛門が私財を投げ出し、発起より15年の歳月をかけて立梅用水が完成しました。

そんな立梅用水が地域の人たちの意識から忘れ去られようとしていました。立梅用水や農地の保全を進めている高橋さんにこの立梅用水や、水と土の先駆者西村彦左衛門のことについてお話を伺いました。

高橋／後継者になっている若者がこの立梅用水がどこで水を取って、どのように流れていくのか知らないという。水道の蛇口といっしょですね。ひねれば水が出て当たり前。やはり農業の形態も変わっていきいますね。変わって行くのですが、そういう中で、改めて用水や農地をもっともっと大事にしていく意識、これをはぐくまなければならないと話されました。

アナウンス／平成5年から丹生地区であじさいいっぱい運動が始まりました。

立梅用水の景観を引き立てることもつながっていきました。あじさいいっぱい運動のきっかけはなんだったのでしょうか。

高橋／この丹生地区の区長さんが、この大師の里周辺にあじさいを植えてみようとおっしゃいました。私も、この用水が工事をされて、コンクリート水路になって、管理道路もむき出しになった状態だったので、のり面や用水路沿いにみんなで努力して植えてくださいといったら、区長さんがそれは「ボランティアでやりたい」とおっしゃった。しかも何年かかってもいいから1万本植えたいという話をされて、各家庭で挿し木をして、それを休耕田に持ち寄って1年間大きくして、植え替えていく。それがきっかけであり、今までの活動の経過です。

アナウンス／これは今年2月に行われた植樹の様子です。今は、旧勢和村一体で行われています。

古来、丹生地区で採掘された水銀が奈良の大仏に使われるなど、この地域は水銀によって大変栄えていました。

水銀の採掘最盛期に建立された丹生地区のシンボル丹生大師です。

あじさい祭りはこの地域の総称「大師の里」、そして水と土の先駆者、西村彦左衛門をタイトルに取り入れることによって歴史や文化もPRしています。

高橋／どういうふうに祭りを仕立てていくんだということなんですね、見ての通りまわりは田んぼと立梅用水だけなんです。こんなところで何ができるかですね。

アナウンス／その一つがこの田んぼの綱引きです。町長も参加しました。立梅用水でのマス釣りも行われました。マスの塩焼きもいただきました。田んぼに作った特設ステージでのコンサートです。一番の人気は立梅用水のボート下りです。先導役は地元中学生のボランティアが務めます。テーマパークを髣髴とさせるようなアトラクション。これは水銀を掘ったあとです。

さて、「水土里（みどり）フォーラム」というのぼりを掲げたブースがあります。これは東海農政局が出展したものです。田んぼや畑、村を潤す水。作物や生き物を育む土。暮らし、文化を作り出す美しい里。これを水土里とよび、この水土里を守り育み、次世代に継承するため都市と農村の出会いの場として設けられたのが水土里フォーラムです。この祭りやあじさいいっぱい運動は、水土里フォーラムの先進的な地域として、全国的に注目を集めています。

高橋／農業や農村は食料の生産だけでなく、いろんな機能を持っているんですね。たとえば美しい景観、懐かしいふるさとの景観を守るとか、大切な農地、用水を守るとか、いろいろな機能を持っています。あるいは伝統文化を守るということもあります。そういうことを広くいろんな方に知っていただき、それをみんなで何とか守りたいという思いを伝えていきたいです。

アナウンス／旧勢和村ではこのほかにもビオトープ作りや演劇などを通した保全やPR活動も続いています。

そして伊勢のおかげ横丁からあじさいの出展の要請が3年前にありました。今まで続けてきた地域の地道な活動の意味を、外部の人たちが理解してくれたことに高橋さんは感動したそうです。

高橋／担当の方が「うちを買ってきて並べる気はない」と。勢和というところは、みんな、地域のためにあじさいづくりをしていると聞いている。立梅用水や、人のおかげといったものをおかげの横丁に出展して頂きたいんだ、というお話がありました。

アナウンス／あじさいは今ちょうど、見ごろを迎えています。

高橋／世の中が便利になって、人と人のつながりがだんだんなくなってきてしまった。農村でもそういうことが頻繁にある。昔は助け合いの中で色々やっていましたが、だんだん失われていってしまった。これからの時代もっともっと、人と人のつながりというものが財産であり、大事な資源だと思います。

アナウンス／新しいものを作るのではなく、今あるものに工夫を加え付加価値をつけ、そこに地域の魅力を取り入れていく。時間のかかる話ですが、多気町では徐々に実を結ぼうとしています。

立梅用水、あじさい、そしてこの人たちが新しい農村の風景を作っていくことでしょう。

私は用水の管理をしなければならぬし、ボランティアをしなければならぬし、このようにテレビにも出なくてはならぬし、何かと最近忙しい毎日です。とりわけあじさい祭りにつきましては、今年10年を迎え、1万人近いお客さんが来てくれるようになりました。もともと雨の時期の祭りなのですが、みごとに今年はいいにくの雨でした。しかしカッパや傘をさして、思った以上に盛況でたくさんのお客さんに来ていただきました。

特にこの立梅用水ボート下り。紹介をさせていただきますが、すごく人気があり、約1時間半待ちくらいの行列がずっとできるのです。無料ということもありますが。ボートでずっと下っていくと、また軽トラックで上流に運ばないといけないんです。これが大変です。役員さんも仕方ないといっていました。なにせ行列を見ると、このボートを増やすしかないんです。そうするとますます上げ下げが大変。最近では中学生がボランティアで応援してくれています。先導役をして、トンネ

ルの中の苦勞のことわざ「岩一升、米一升」をお客さんに紹介してくれています。それとボートの上げ下げを協力してくれています。

これは、田んぼの綱引きです。今年は過去最高の15チーム参加していただきました。遠くベトナムからも参加していただきました。三重大学の女子学生も参加してくれました。いろんな形の中で、今年は15チームも参加して、大変好評でした。それからこれは用水でのマス釣りですね。

田んぼや農業用施設がイベントの最大の舞台になっている。私はこのあじさい祭りから学ばせていただいたのは、どんな殺風景なところでもちょっと花を植えきれいにするだけで、大勢の人は寄ってくるし、農業用水や農地、こんなものでも格好のイベントの舞台になるんだなと。

そして、毎年あじさいというのは、開花率が違います。今年は非常に遅れていますが、それが自然なんです。その自然が来て頂くお客さまにとって、新鮮さがあって、今年は遅いとか、早いとか自己評価をされますが、このことが自然と向かい合ったこの祭り全体の新鮮さなんだ、こういうところに又、自然を楽しむ面白さがあるのだと思います。

## 地域資源の活用

平成10年から地域用水機能増進事業を進めています。戦後60年以上に渡り、土地改良事業は食料生産を目的に進められてきたのですが、昔の立梅用水は、もともと生活のための用水でした。野菜を洗い、子どもたちが水に親しんで遊ぶ。いざというときには、火災に対応するという、生活用水、地域用水としての役割がありました。それをもう一度、灌漑のみならず、暮らしに役立つ地域用水を創ろうということで、地域の人々と土地改良区が協働し地域用水機能増進活動を進めています。用水全線にあじさいを植え景観機能の増進や、用水を活用した里山用水ウォーキングを開催し、健康づくりや交流の場としての機能増進も進めています。防火機能では、過去20年間には人家火災4件、林野火災1件ということで火災対応もしていますが、さらに広域消防との連携や管理の体制整備も進めています。

そして、これは私が住んでいる波多瀬という地区です。ここは薬草学の先駆者である、野呂元丈というお医者さんが誕生しました。八代将軍吉宗のお抱え医師であり、オランダの薬草医学を日本に初めて紹介したという立派なお医者さんです。その誕生の地にちなみまして、このような元丈の里づくりということを積極的に進めています。4年前に自然体験学校というのを開校しまして、いろんなハーブを使ったリース作りだとか、草もち作りとか、薬草入りのうどん作りなどを親子で体験することができます。いろいろなハーブを使った足湯はすごく人気です。これが元丈の里の名物にもなりつつあります。

もちろん私たち水土里ネットも協力して、自然体験学校をやっています。

ここで一番注目すべきは、ここの自然体験学校の指導員は地域の農家の人ばかりだということです。そういうことを通じて、地域資源を活用することに地域の人達が自信を持ってくれました。これが大きな成果だと思います。

(スライド11)

**あぜ道とせせらぎづくり活動(平成15年～)**  
**元丈の里・自然体験学校**



元丈の里運営委員会と水土里ネットの協働  
地域資源の活用に自信・・・地域の人びと

## ふるさと水と土の保全活動の影響と効果

こういう一連の「ふるさと水と土保全活動」を通じまして、平成9年9月には、「豊かな村づく

り」農林水産大臣賞という賞をいただきました。それから平成 15 年 10 月には今、全国展開されています「21 世紀土地改良区創造運動大賞」、副題を「地域づくりフロンティア」ということで大賞をいただきまして、地域全体で喜びました。

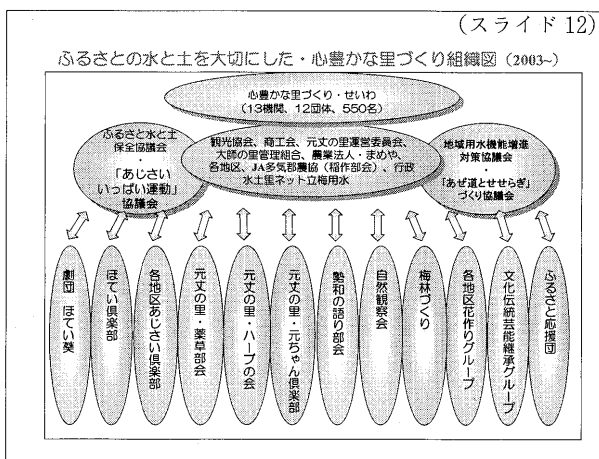
この活動の影響と効果を分類してみますと、地域の人々にとっては、地域活動を通じてコミュニティの本質である助け合う心を思い出させてくれ、地域に対する誇りや愛着を取り戻してくれたことです。

私たち水土里ネットの役割としては、農地とか農業施設を直接管理しています関係、人と地域資源を結ぶコーディネーターを積極的にやってきたと思います。そういうことを通じて、地域活動とともにさせていただき、立梅用水の地域資源としての価値や多面的機能、それを直接管理する水土里ネットの役割が地域の人にとってわかりやすくなったと言うことです。

地域の人々も水土里ネットにもよかったのは、身近になる歴史や文化、私たちの地域に与えられた大切な地域資源であり、これをみんなが享受し活かすことが大切なんだということ。

それから地域資源を保全するため、活用することであり、逆に活用することが保全につながるという相関関係があること。これはつよく感じました。思考的に言うと、保全と活用は、内と外、守りと攻め、そのような相関関係もあると思います。そこに地域の人々が介在している訳で、その地域の人々に地域資源を享受していく価値観が理解されなければ、自発的な活動にはなかなか繋がらないと思います。

スライド 12 が私たちの組織図です。それぞれにふるさとの水と土を保全し又活用し、13 機関 12 団体。550 名ほどで活動しています。演劇を通じた活動、休耕田の活用をするほてい倶楽部、それから各地区あじさい倶楽部、これは全地区にごぞいます。それから元丈の里のグループ。最近大活躍しているグループが、勢和の語り部会。語り部さんは単に観光ボランティアをしているだけでなく、地域の人たちの活動をも紹介してくれています。いわゆる地域活動の広報のような役割です。地域づくりから見ても語り部さんは大事な役割です。



## 農業法人せいわの里「まめや」誕生

特に最近大変嬉しく思っているのは、元丈の里、元ちゃん倶楽部というのが（主に地元大豆を使って味噌作りをするグループです）、そこが昨年 4 月に農業法人「まめや」というのを立ち上げてくれました。これを私は大変喜んでいますが、あじさいを植え始めたころ、ある大学の先生が私のところにきて、こういうことをおっしゃいました。「こうやって毎年あじさいを植栽して、景観づくりはできますが、景色残って、農業を滅びるではさびしいですね。」と。これは私にとって常に頭の中から離れない言葉でした。私自身もずっとそう思っていました。何とか景観づくりしながら、いろんな活動をしなが、このコミュニティというものが何か新しいものを作ってくれないかなと思っていましたら、元ちゃん倶楽部を母体として、農業法人「まめや」が誕生しました。

これはどういうことをしているのかというと、農業法人せいわの里「まめや」が正式な名前ですが、コミュニティビジネスということで、三重県では初めてのタイプです。地元の集落営農組合が大豆を作っていますが、この大豆を使って、味噌、豆腐、アゲなどの食材を生産します。その食材を学校給食、600 食を週 2 回という形で提供する。そして農村料理バイキングとして、農村料理



店をしました。大豆を使った農村料理体験もやっています。(スライド 13)

コミュニティービジネスということで、要するに、商売優先というのではなく、地域の資源、農業というものがあり、それをもとにして、この商売、事業が成り立ち、この事業から生まれる、利益は地元に還元するという事です。大豆を中心とした地産地消の実践、それから食文化の伝承、雇用の創出という目的を掲げています。

食文化の伝承、雇用の創出ということでは、30 歳から 80 歳まで、20 人が勤められています。80 歳のおばあさんが 3 人ほどいらっちゃって、このおばあさんたちが、食文化、郷土の食事、料理の方法を伝えています。ここでは、肉や魚は一切ございません。タンパク質は大豆からということでこれが今、すごく受けていて、スローフードということもあるのですが、女性の方にたくさん来ていただいています。今、あじさいのシーズンですが、一日 3 時間の営業ですが、150 人から多い日には、200 人も来ていただきますごくにぎわっています。

以前NHKの番組で茉奈佳奈ちゃんが、子ども役で登場する番組がありましたね。NHKの連続ドラマの番組で。あの茉奈佳奈ちゃんが立梅用水のボート下りをしたいとたずねて来まして、「まめや」さんに寄ってくれました。(「まめや」ビデオ割愛)

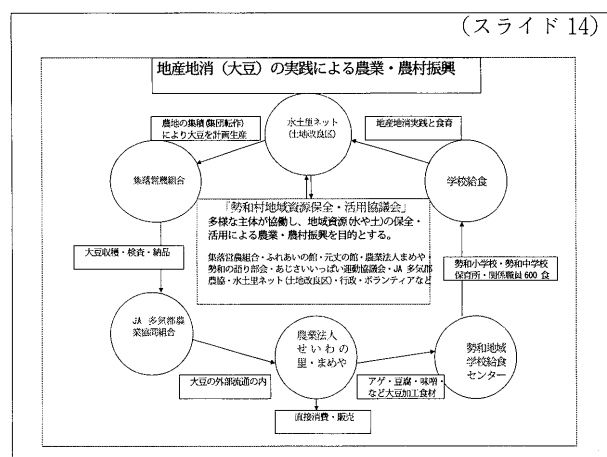
無我夢中でやってきました「まめや」は、ちょうど 1 年たちました。働いている皆さんの賃金は、時給 500 円ということで、最低賃金に満たないほどです。そういう形の中でも、毎日忙しいのですが、みんな笑顔を大切に、張り合いを持って協力し合ってがんばっていただいています。ぜひ、多気町勢和地域にお越しの際には、「まめや」にお立ち寄りください。

コミュニティービジネスということで、いろんなタイプのものがあると思いますが、いろんな地域資源を活用し、どこでも取り組んでいただけることではないかと思います。目的は利益中心ではありません。

ここで、大豆の生産から消費まで、大豆の地産地消ですね。これを図にしますとスライド 14 となります。

この丹生地区は 120 ヘクタール農地があって、まず土地改良区が農地集積、集団転作を計画して、それに基づき集落営農組合が麦の後作として大豆を生産します。それが J A 多気郡農協に納品されます。J A 多気郡農協の外部流通の一部が先程の「まめや」に行きます。昨年の実績ですと、地域生産量 600 俵のうちの「まめや」は 6 分の 1 の 100 俵を消費しました。

この内訳は、「まめや」がレストランで直接消費する部分と惣菜として販売するものです。それから味噌、豆腐、アゲの加工食品を学校給食の食材として提供されます。給食センターは、勢和小中学校、保育所、などの 600 食の給食として週 2 回提供されます。これは地産地消と食育という形で地域に返ってくる訳です。このことで私たち地域で生産された大豆が地域で消費されるまでの循環系が出来上がったわけです。まだまだ小規模なものです、将来、この循環系が地域農業の振興の面で大事な役割をしていくことになると思います。



## これからの私たち地域

ちょうど時間になりましたが、平成 19 年から農業政策も大きく変わるといわれています。産業政策と、地域振興政策を区分して地域資源を保全する「農地・水農村環境保全向上活動」が全国的に展開されようとしています。私たちの地域では、今まで地域コミュニティから生まれたものを結び、しっかりとネットワーク化を図っていこうと考えています。「ふれあいの館」の地物一番、「元丈の館」の自然体験学校、農業法人の「まめや」の農村料理バイキング、地域の全地区で取り組むあじさいいっぱい運動、立梅用水ウォーキング、劇団「はてい葵」、勢和の語り部会、集落営農組合、こういう多用な主体の参加をいただき、ネットワークを図り、豊かな資源空間の活用と都市と農村の交流を深め、地域の振興につなげていきたいと考えています。

今日はどうぞ静聴いただきありがとうございました。

司会／高橋先生、ありがとうございました。その後、質疑応答、そして玉井先生に話をいただきたいと思います。その前に 10 分ほど休憩をいただきます。

## 質問タイム

会場／私は都市の生活をしてきましたが、都市の労働者の生活と農村の生活とを見ますと、都市といっても川崎横浜の工場地帯ですがまことに日本の社会は都市労働者を犠牲にしている。こういう状況で、農村の美しさとか、村の良さとかを宣伝しているのは、はなはだ矛盾していると思います。日本の農村の指導者はもう少し、自分のことばかり考えず、日本全体のこと、都市のこと、都市労働者のこと、外国の環境も考えませんか。今、国際的に見ると、農産物の自由化というのがありますが、いかに日本の農産物が高いかということ。都市労働者は、自分たちの働いたものは、国際価格で外国に出すが、自分たちが毎日食べるものの国内価格は、米にしても国際水準より 10 倍も高いものを食べている。そういう矛盾の上に農村は成り立っている。もう少し農業政策を合理化することを考えてもらいたいです。以上です。

玉井／信州人の学習会にふさわしいようなご意見です。私も農家のせがれで、学校の教師をしていました。農村が都市労働者のことを考えていないというお話でしたが、では、都市労働者が農村のことを考えていますか？ そんな人はいない。我々はかつてみんな農民でした。日本人の 85% が農民だった。明治時代から大正時代にかけて。それが農民だと、みんななかなか食べていられない。どうしてかという、農村の税金で工業を発展させようという政策です。当時のことを考えると、農民からの税金が国家予算の 92% でした。そしてそれを使って日本を近代化しようと、三井・住友・安田などを育てたんです。それで日本の工業は進んでいきました。それでそっちのほうにお金があり、農家に残っても、生活できないということで、農村からどんどん都市へ行きました。

昭和始めの恐慌のときも、都市へ行った人々が、大都市の恐慌の中で生きていけなくて、農村へと帰ってきたのです。その人たちを農村が支えたのです。そしてやがて、戦争になったりして、ま

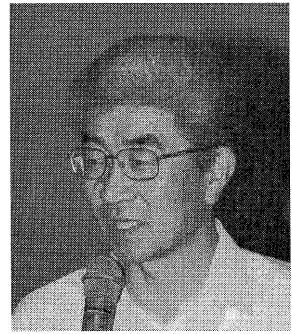


た工業は再び発展していく。失業者だった人々がまた都会へ帰っていった。ところが、戦争に負けた。また都市労働者は農村に帰ってきた。渡り鳥のように帰って来た。帰ってきたら、農民は疎開者に対して不親切だといっているが、しかし農民は食わしてあげたんだ。

会場／農村がいいというのは、出生率を見ればいいんです。東京の出生率は1を割っています。農村は都市よりはるかに出生率が良いです。農村の指導者は、自民党のもとに税金も有利なんです。農産物価格もいくらでも高くする。

西場／私は自民党で来ているわけではありませんが、少し発言してよいですか。

今の話を聞かせていただいて思うのは、自民党のかつての農政が、農村、農家のために手厚い配慮をしてきたのは事実です。右肩上がりの経済成長の中で都市部からの税収財源を農業者や農村に対しても配分してきました。経済成長の中で、そういう余力があった。しかし現在は、むしろ都市中心の発想と対応に変わりました。これは小泉さんの今の自民党の改革の実態です。



私のような農村をベースにした議員は、自民党員ですが、今の日本の政治の流れについては大変不満に思っています。今の日本の政治のあり方が、これで良いとは決して思いません。今後、経済に余裕ができ、財政力が回復できたら、その余力を農村や中小企業者に対して積極的に配分してゆくことを願っています。そして、そのことを自民党の政策の基本原則、精神として、これからも維持していったほしいと思っています。

先ほどあなたが言われた都市政策の重点化は、まさに今の自民党の政治の流れそのものです。都市部から上がってきた税金を都市へ返す。いわゆる納税者起点の政治を進めてゆくことは、現代社会のグローバリズムの中で、経済性、コスト、効率性を中心として、日本の社会、世界の体制を変えていこうとする国際的潮流です。

しかし、このままで進んでしまったら、人口の多い都市はますます良くなっても、農村はどうなってしまうのでしょうか。流域で運命共同体として川上から川下まで一体となった地域社会が出来上がっている。この流域社会の中で、下流の都市部がもう少し山元に農村に配慮すべきであります。これがこれから期待される新しい動きなのです。その小さな一つの活動ではありますが、大切な新しい芽生えとして今日は勢和の取り組みを紹介しているのです。

司会／ありがとうございました。大事な話ではありますが、一つ一つの花を植えたり、地域の水を見ていたり、身近なところから考えていこうという、今日はそういう主旨ですので、最初に変な議論になってしまいましたが、気後れせずに、ご意見ご質問がありましたらいただければと思います。

会場／伊那から来たタカギと申します。高橋先生、非常に色々な取り組みをしていらっしゃるのに、威張るところがなく、実績を淡々とお話いただき、胸に落ちるものがありました。

兼業率が非常に高い地域で、人がまとまっていくのがすごく難しいと思います。実態の中ですばらしいと思うのは、小学生に教えることで、親御さんを教育して、おじいさんと子どもがつながるので、わからなかった「出会」によって、嫌がっていた小学生のお父さんお母さんもつながってくるということを感じました。兼業率が多い地帯でも、「水のご縁」で、地域が一つになれるというか、地域がそういう宝物に気づくという部分が、どういうところから、「水のご縁」といえばそれまでですが、もう少し農業にたずさわっていない人たちもこの活動にかかわってきたというところ

で、ヒントになる部分というか、秘訣のようなもので感じているものがあれば、お話しください。

高橋／戦後、私たちの地域のほとんどは、農業しながらの生活でした。機械もなにもない時代は、手作業で共同で田植えをしていました。それが農村地域の生活そのものでした。それが近郊の町に工場ができてくると、生活しなければならないので、生活できないので、工場で働くようになってきました。兼業率が96%ということで、農業以外の所得なしでは生活できないという現状にあります。こんなふうに世代は変わっていくのです。

どんどん変わっていくものの中に、大事な部分というものがあります。私たちの生活の部分で、助け合いだったり、これは農業そのものだけでなく、生活の細部全体にわたって、そういうものがあります。そうした中で人のつながり、助け合いなどはどんどんなくなっていきます。やはりそこらをもう一度、復元していく必要が益々あると思います。そうでなければ、日本国中、自然が失われていくことになると思います。

ある地域では、村が崩壊して、人が住まないようになったというところもあります。やはり経済優先に動く。いま一度、農業の役割は食糧生産だけでないという点を確認したいと思います。そういうところが、皆さんまだまだあいまいにとらえているところだと思います。ましてや私たちの地域の農業は生産性の悪いところですよ。そういうところは、どんどん荒れてくるんです。これを放置したら、私も10年したら定年で農業をしようと思いますが、10年先に私と同じように農業をしている人が何人いるのかと疑問に思います。今は60代70代の方がまだがんばってくれていますが、10年先も頑張っているかといえば、やってくれないでしょう。

そう考えたとき、これからの営農形態は、みんなの集落でやったり、助け合いの中で維持するだけだと思います。なかなか生産性を上げるところまではいかないと思います。助け合いというのを、もう一度集落機能として位置づけて、農業をみんなで考えていく。これからの農政は産業政策と地域振興策とははっきり分けるといっていますから。産業政策として、やはり担い手に農地を集積し、攻めの農業生産効果をあげていく。反面、地域振興策として、水とか土の資源は、別の意味で守って行かなくてはならないと思います。それは人と人の協力なしでは、絶対できないと思っています。

司会／ありがとうございました。では、他にございませんか。

会場／木曽村というところからきましたタケイです。大変有益なお話をありがとうございました。先程の質問を聞いていましたら、いろんなことを感じたのですが、今は、こういう農村を大切にするということは、今までの時代があまりにも国土環境を破壊しすぎたと。そのツケがまわってきているという認識も大切だと思います。

今までは、農政は国や自治体に要求したわけですが、こういうふうと一緒に働くということで、新しい環境を作っていくと。そこに所属感があると思います。そこに花を植えるということで、花というか、環境を良くするということ、平和という問題ですね。突き詰めていくと、平和とか、戦争ということになって行きます。国土や環境を守るとは、皆さんがお互いに力を出して、皆さんの居場所を作っていく。ただ花を植えてきれいだというのも良いですが、そこにある深い思想も存在すると思います。

司会／ありがとうございました。では、そちらの方。

会場／松本市の庄内から来たカミジョウです。私の地域は、田川という川がございます。薄川とはちょっと違いますが。下のほうでつながっています。現在、薄川の地域では水害のことで、ダムがなかったともめています。田川という、私の地域も非常に危険な状況になっています。小さいと

きから話を聞いています。小さいときには、川で遊んでいましたから。

その川が、田んぼが少なくなって、だんだん暴れ川になっています。最近になって、瞬間的に増水します。数年前に我が家も水害にあいました。自宅の周りは地域開発があり、区画整理をして、田んぼをなくしました。ちょうどその頃役員をやっていたので、田んぼがなくなって、地域がどうなるかと、注目していました。結果としてあったのが、町づくりといいながら、やっていることは、赤字をどうやって出さないかということで精一杯でした。

今日、お話を聞いていて感銘したのは、本来ある町づくりです。人を作って、そして地域をどうするかというところで、お金も補助金もかけず、足りるところでしっかりやろうという方向があったということで感動しました。

残念ながら、私の地域でもそうしたかったのですが、東京と同じように赤字を出してしまって、どうにもならない区画がたくさんあります。中には裁判沙汰になって今でも争っているところもあります。そういうことと比べると、非常に哲学に基づいた地域を作ってくれたと感動しました。

一番大事なことは、田んぼというのは、保水能力ですね。水害のところで、田んぼが少なくなって、田川は危険な状態になって、昔だったら堤防がなくてもあふれることはなかったのに、今はポンプをつけろと、問題になっています。そういう面からいうと、僕は逆に信州でも今日のような新しい考え方は、見習いたいと思います。皆さんいかがでしょうか。 <拍手>

司会／ありがとうございました。他にいかがでしょうか。ご質問でも結構です。

会場／私は、伊那からきましたカラキと申します。

単純なことをお聞きしたいのですが、用水路ですね。コンクリートで敷き詰めたという話を聞きましたが、実は私は、伊那市内に住んでいます。かつては、私の住宅の脇に、幅4～5メートルくらいの用水路、川が流れていました。昭和30年頃まで、魚がどんどんと行き来していました。市街地から、人が見に来ていたという話をおじいさんおばあさんから聞いていました。用水路をコンクリートにしてしまって、魚などは住まなくなってぜんぜんいませんが、今、お聞きして、そういうところはどうしましたか？ 環境はまったく変わってきているということですよ。単純なことですが、よろしくお願いします。

高橋／おっしゃるとおり、私も小さいときには、用水路で色々な生き物を取りました。そのときは、土の水路、石積みの水路で、用水が止まりますと、石の間に手を入れるとうなぎなどがいっぱい取れました。

そういう思いがあって、自分の仕事で土地改良事業をやったとき、小さいときにはああいうところで遊んだな、コンクリート水路にしたら生き物は住めないな。しかし、これは農業者にとってなんとしてもやらなくてはならない事業ということで、大変ジレンマがありました。悲しいかな、昭和60年頃は、まだまだ環境との調和と配慮とか、自然工法を取り入れる時代では、ありませんでした。当時は、効率性ばかりでした。残念に思うことも多かったのですが、水路の漏水とかもあり、水路の管理も大変なので、コンクリート水路にしなければならないという板ばさみでした。

私たちの地域でできることは、荒れた休耕田がどんどん増えてきていましたので、せめて事業でいなくなった生き物を農村のビオトープで増やしてやろう。それがせめてもの償いというか、配慮というか。ただ、ビオトープを造って生き物がいるだけではダメなので、それを教育的に活用していくということも大事だと考えています。

自然というのは、食物連鎖が活発になればいろんな生き物がわいてきます。荒れていく農地がたくさんありますので、自然再生にも努力して行きたいと考えています。

司会／ありがとうございました。

会場／私は、安曇野市におりまして、現在役員をしています。今日こちらで学習会があるということで、参加させていただきました。

私も単なる小さな土地改良の役員ですが、今の高橋先生のお話をお聞きして、感銘を受けまして、どうしてこんなことがもっと早く我々にできなかったのかと感じている次第です。もっと、みんなが協力し合い、あるいはお互いに入れるところは入れたり、協力し合えば、ここにあるような本当に良い地域ができるのではないかと。大げさに言うと、もっといい日本ができるのではないかと思います。

高橋先生にちょっと一言だけ。こんな立派なお話を聞かせていただきまして、私どもこれから実践するというか、役員ですので、地域の皆さん方と、お互いの地域づくり、町づくりを進めていくうえで、何か参考になるポイントがありましたら、ちょっとお話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

高橋／地域づくりに「協働」ということを取り入れることは大切で、あじさいを植えるという活動の中にそれを取り入れた訳ですが、人と人が対等の立場で考え、協力し合うことが大切だと思います。それは、地域活動にもいろいろなものがありますが、私たちの地域では、獅子舞神事の文化を守るとか、景観づくりや演劇活動、農村環境づくりなど、そういった活動を通じ、いろんな人と人の関わりの中に、仲間づくりを大切にすることだとも思っています。

共同作業は、強制参加とかというような雰囲気ですと大変疲れてきますので、長続きしません。結果を求めるのではなくて、できることで持続的にずっとやっていける方法を考えることだと思います。持続性の中にどんどんと相乗効果も生まれてくると思います。色々な異分野との融合も生れて来ますね。一つのものだけでなく、子どもたちを入れて、入れることで子どもたちの教育につながるとか、老人の生きがい対策としてやるとか、これから団塊世代もできてくるということで、色々な人が第二の人生だと思ってボランティアでやっていただくとか、色々な要素を取り入れながら、楽しく活動を進めていくということ。たまには休んで持続的にやっていくということが大事だと思います。

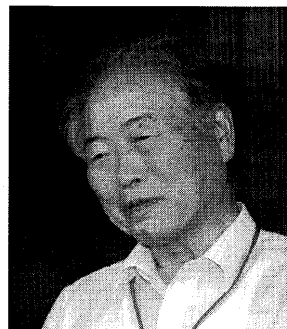
司会／ありがとうございました。

まだまだ本当は続けたいのですが、時間になりましたので、この辺で、今日のこの学習会を発案した、一番の思いを持って企画を考えていただいた玉井先生から、まとめを兼ねてお話をいただいて、閉めにしたいと思います。

#### 4. おわりに

玉井／はじめに大変な質問が出てしまったものですから、私も80歳の老骨だというのに、年甲斐もなく、一時脳溢血になるかと思いました。

農業のことを考えますと、ひたすら農業にのめり込んでしまいます。私も年をとりました。昭和の恐慌も、戦後のことも知っていますし、そういう中で、農村の果たす役割、高度経済成長の中で都市の労働者がどういう状況であったかは知っているわけです。決して、農業出身ですが、農業を賛美するばかりではありません。農民もそんなにすばらしくはありません。欲は深いし、規則は守れないし、本当になんともしょうがない。唯一、お天道様にだけは絶対に頭を下げています。これで私のような脱落した人にとっては、



あれはすべて農民にはそういう思いがあるということです。

今日、高橋さんの話を聞いていて、私が思うのは、質問にもありましたが、地域づくりというのは、何かいろんなことをするのに、必ず、私の頭の中にあるルールがあります。ここに書いてあります。

このオープンカレッジのチラシのところに開催趣旨があります。ここに地域づくりでも企業づくりでも、これは本物とか、ああ立派とか思われる地域は、何か共通するものがあるようです。私は長い間いろんなことを見てきています。共通するものがあるようです。一つは、そこには人間開眼ドラマがある。だらだらだらだら生活していつの間にか変わったということはありません。どこかで目が覚めた。人生開眼だ。

それは戦後、民主主義教育の中では1人の100歩前進より100人の1歩前進のほうが大事だといってきました。しかし、実践的には不可能です。100人が1歩前進したと思えないときには、1人が100歩も万歩も成長した人は先に行けばよい。そして次に100人が1歩というふうに。これが運動のリアリズムだと思う。練習ではないのだから、1歩前に出るのに、100人が全員1歩前に出ると思えない。高橋さんも淡々と語っているが、どこかで人生開眼の歌があったのではないかと思っています。

2番目に、そこには仲間づくりの物語がある。いくら1歩万歩前に進んでも、仲間がなかったらできないんです。ところが一人が最初に何かやっていると、それを見た人が何をやっているのかと、そうか、では俺も手伝おうと。仲間づくりの物語があると、きっと高橋さんにもそういう物語があると思います。

それから技術論、学習論のドキュメントを見るようなもの。技術論というのは、私は困ったときにどうするかということだと思います。行き詰ったときにどうするかということです。だいたい行き詰ると、政府自民党のせいだといいます。政府自民党をやっつけろと、私も昔、組合役員でやったことがあります。時代背景で、自民党政治打倒のときがありましたが、怖くて、あわてて逃げてきましたが。こういうこともありました。しかし、技術論というのは、そういうふうに問題を一般化して、政府や自民党のせいにしてしまったら、いつまでも解決しないのです。問題を小さく小さくして、そして今、自分が解決しなければならない問題をとらえて、自分の力でできる中で問題をつかまえてそこからやっていく。それができないと、政府や自民党のせいになってしまう。二つに分かれるのです。高橋さんは、政府自民党のせいになかった。自分のできることは何かと。もちろん、大きな政治状況がありますので、その中でどうにもならないこともあります。今、当面自分のできる問題をどうやって解決するか、いろんな人と話し合っ、ああだのこうだのといっている間に解決できたのだと思います。そういうことがあると思います。

もう一つは、風土という舞台の上で演じられるドラマだと。多気町という、昔の勢和村、あの辺の風土というものがあります。昔は水銀を取っていました。他の地域にはない風土ですから。歴史があったり、いろんなものがあります。それからそういう風土の中で演じられるので、風土性というのは必ずあります。

私がこの話を聞いていて思うのは、安曇野というところは非常に特殊なところですから。高橋さんのところは高いところから水を延々と引いてきたわけ。ここ安曇野はそんなに延々と水を引いてきたわけではありませんが、水は低いところにあります。低いところにあるので、高いところに持っていくにはどうすればよいかという問題があります。いくつかのせぎを作って、ものすごいしかけを作って、異様な光景です。しかし、それは実に感動的な光景です。ああいうものが、人々に感動を与えると。もちろん30キロも離れたところから延々と持ってきて、水を、水路を大事にした、トンネルを掘って大事にしてきた高橋さんの勢和町も感動を与えます。安曇野でも、まともに農業のことを考えた人、あるいは農業でなくても米を作った人、これは感動ものです。

では、これらが十分に大切にされているか。いや、ちょっとまてよと。もっと大事にする仕方が

あるのではないかと。もっと手のうち方あるのではないかと考える。そこで、高橋さんに来ていただくことになったわけです。

風土というものがあります。私は見たことがないような、ホテアオイ。ホテアオイがありますね。紫色ですね。あれはどういう色でしょうか。この人のシャツのような色ですか？ こんな色ですか。

神秘的な花で、実にきれいに咲いていました。信州では見たことがありませんでした。あじさいは信州にもありますが、その花をじつに生かしてある。

風土という舞台の上に繰り広げられるドラマと。そこからは理想の未来をめざす旅立ちの歌が聞こえる。

いろんな村づくりをしてきましたが、あれは歴史に後ろ向きみたいなのところがあります。どんどん開発して、看板を立てていますが、そのうちに同じようなものがいくらでもあると。安曇野は少し反省して、今のうちに考え直したほうが良いような感じがしています。

この未来を目指す旅立ちの歌。こんなの安曇野で描いてみたいです。信州の各地で、村づくりの中で。100年、1000年後を考えて、そして前のほうへ行くような村づくりというのを。そこらへ競馬場の馬券売り場を作るとか、いろんなことを考えていましたが、新しい村づくりというのはどういうふうになるのか、考えていきたいと思います。

もう一つ、今、土地改良区というのがあります。高橋さんは土地改良区の役員ですが、土地改良区というのは、一応任務を終えた。任務は終えたが、組織はあると。その組織はどうなっているかということ、選挙のときに活躍するのではないかと。悪い予感します。そういう時は自民党のほうへ引っ張ろうと思います。自民党の議員に土地改良区は歴史的な組織ですが任務は終わりました。どう考えたらよろしいでしょうか。この中には、自民党、民主党、まゝ共産党は一人だけいらっしゃいますが、さしあたり。

西場／今日はこんなに出席が来るとは思いませんでした。土地改良区、関係者の方もたくさんいらっしゃるの、私より良くご存知の方が多くいらっしゃると思いますが。

土地改良区は、戦後の日本の農政をぐんぐん引っ張ってきました。農地の基盤整備事業をはじめとする土地改良事業の力を持って、日本の農村風景も農業も変化してきました。ただ、その農業の変わり様の中で、良くなった部分はもちろんあります。ありますが、すべてみんなが良かったかというと、今日の話にもありましたが、須掘りの用水路がコンクリートに変わり、いつの間にか、メダカ、タニシ、ドジョウが身近になくなってしまった。このことに気づくとき、土地改良事業の果たした役割の大きさを認めながらも、それによって、失ったものの大きさを率直に認めざるを得ない。その中で今後の脳性のあり方について農業用水や農道整備などのハードと農業農村振興策のソフトをどのように連動させてゆけるかが重要なテーマとなっております。

高橋さんの今日の話の中で言われた土地改良区の、21世紀創造運動とか、それから土地改良区の名前をあえて水と土とそして里という3文字をつけて、「水土里（みどり）ネット」に変えたことなどは、これからの新しい土地改良区をどうしようかという取り組みの現われだと思います。

今後の改良区においては、従来の用水管理だけでなく、農業農村の管理運営など農政全般にどう関わるか、あるいは農村のコーディネーターとして人材ネットワークづくりにどう関わるか、そして農村の環境保全とどう関わるかといった視点から新しい仕事が展開されていくものと思います。

今、日本の農業は大転換期だといわれています。それは大豆・麦といった、品目別にそれぞれ個別に助成していた農業施策の補助体系が来年から一変します。品目横断型経営安定対策が新しく始まります。品目ごとの補助金はなくなり、補助対象は個別経営では認定農家で経営規模4ヘクタール以上、集落営農では20ヘクタール以上の担い手に限られることになります。今日の話の中で、兼業が地域を支えているという話がありましたが、まさにその視点が忘れられて国の施策が進めら



れています。

今日は色々なことが指摘されていましたが、農業問題はつまるところ自給率低下と担い手不足だと思います。自給率でいうと、昭和40年頃70数%あったものが、今は40%になっています。昭和60年頃の水田農家は520万戸だったのに、今は300万戸。激減ですよ。もう限界を超えています。ですから、このまま行けば、農業の衰退問題にとどまらず、日本の地域社会の崩壊につながるころまで来ているのではないかと断じてほっておくわけにはいかないのです。そのときにこれまでの経済効率性の考え方だけでいいのかどうか。4ヘクタールあるいは20ヘクタール以上の一部の経営だけを支えるということだけで、はたして農村全体を守れるのか。農村を守れなくて日本の地域社会を守れるのかといった農政議論と踏ん張りをしっかりやっていかねばなりません。

更に、もう一つ新しく出てきた政策が、農地・水・環境保全事業。今まで集落単位でやってきた用水路や農道維持管理の共同作業である「出会」というものをシステム化して、地域社会の皆さんと協働して、環境保全や減農薬も取り入れて進めていく新規事業です。公的助成学費10アールあたり4400円で実施予定。今年はモデル事業ですが、来年からは全面展開していきます。これは日本の農山村全体に関わってくることになるので大変なことになります。こういう新事業の展開の中で、土地改良区がどういう役割を果たしてくれるのか、ものすごく興味があります。

今まで役場も農協もがんばってきてもらいましたが、ここでそろそろ土地改良区の出番であり、新しい展開をしていただくことがものすごく重要だと思っています。閉めがあいまいになりましたが、こんなところです。

玉井／ありがとうございます。やはり政治家は政治家らしく考えていますね。いつの間にかこんな立派な政治家になっているなんて。僕の授業を聞かなかったせいですね。いつも教室にいたことはありませんでした。

これで終わりますが、参会して下さった佐久の方々が、こういうものを置いてくれています。あとで読んでください。

「黙って死んじゃまおうじゃなかれ、おのおの方。ゲートボールに、温泉旅行、いい時代だなあ。ありがたいご時勢だよ。などといっちゃいるけど、極楽トンボじゃあるまいし、固定ヒーターは持ってねえ。おれたちはすいとんせ。子は孫たちはどうなるぞら。お年寄りも余計なことを考えず、一日一日楽しく豊かにといわれているけど、日本が滅びるかもしれないのに、楽しく豊かでもないものだ。黙って死んじゃまう手もなかつたら、おのおの方。われらは20世紀を行きぬいた戦士だ。県がキャリアを持ったまま、返り咲くわけにはいかねえぞら。今、日本は大ピンチ。後の世代に語り伝えよ。持続可能な生活文化を。自給可能な生産技術を。楽しく豊かな老後にしようと、おかめごかしの老人福祉に鼻毛を伸ばしてはいけないよ。」

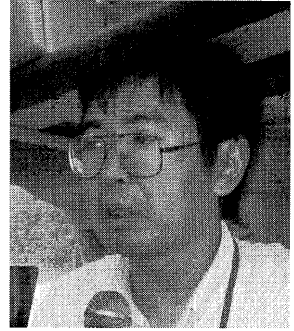
これは私の真夏の夢に描いた文章です。佐久の三羽鳥。

絵を描く人もいて、ちゃんと持ってきてくれる人もいて、その後見人、あそこにはいますが、あのおっさんが、裏方です。なかなかうまい。まあ、若い人もいますが、年配の我々もみんな、何をするのか、きちんと考えておかなければならないと思う。

おそらく9月のはじめか、あまり忙しくないときに、松本大学で希望者を募りバスを出して、高橋さんのところとか、お医者さんのところとか、隣の西場議員の近くには、すばらしいものがあります。この辺の人は見たことがないものがあります。高橋さんのところを見学しますので、そのときには、お申し付けください。では、よろしく。

司会／玉井先生、ありがとうございました。玉井先生がおっしゃったように、9月に研修会を受けて、研修ツアーを計画しています。今日ご参加の方々には、大学のほうから日程、申し込み等のご連絡をさせていただきます。

私も今日一日聞いておりました、つい先日も、この周辺のある村の方が来られて、10年後にその村は6割の畑、田んぼの担い手がいないと。このままいくと、10年後には6割がなくなるかもしれないといいました。農業で大変有名な村です。その村が持っているんだというのが一方でありながら、今日話を聞いて、うちの若い女性の教員が言ったのですが、かつて若者は、村がいやで村を捨てて都会に出て行ったが、結局都会でも、会社特有の村を作ってそこに住み着いている。その村が実はいつまでもいられない村になってしまっていて、リストラで放り出されたり、定年後もかつては面倒も見てくれたが、定年後も社会保険の関係で、面倒を見てくれなくなる。そのとき、農村の村がなくなったように、都会の村もなくなる。どこにどういう村を作っていくのかというのを、今の若者は右往左往しながら見ているのではないか。今、この大学にやってくる学生たちは、ここで何かをしたいという思いを持ってやってくるのと同じではないか。そこで彼らを担えるような地域をここ数年間の間に保てるかどうかというのが、まさに課題なのだと思います。



そういうために、今日の学習会は、ただの学習会ではなく、これを基点として、この地域で何かを起こすきっかけになればと思います。

今日は高橋先生、西場先生、ありがとうございます。お二人に拍手をお願いします。

そして、横でちょっと血管が切れるのではないかとってはらはらしていた玉井先生もありがとうございました。熱心な質疑をしていただいた方々、ありがとうございました。

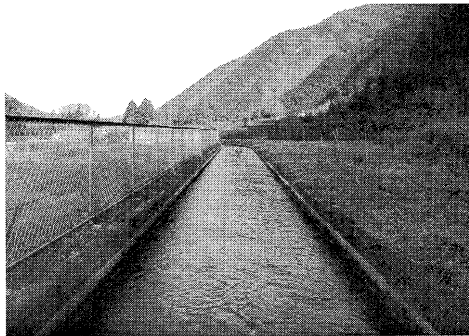
これで学習会を閉会にいたします。ありがとうございました。

## 5. 講演会資料

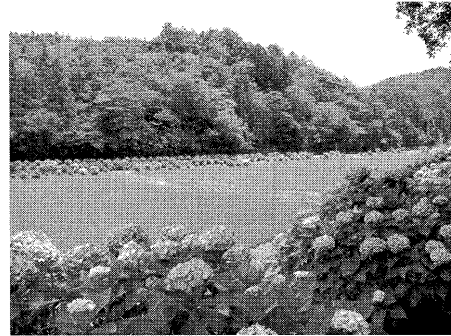
## 地域資源の保全・活用のためのネットワークづくり

## 村の暮らしを潤してきた立梅用水

農山村を襲う少子高齢化と後継者不足による耕作放棄地の増大は、地域経済の低迷や集落機能の低下だけでなく、日本の良き風景であった農村景観の荒廃をも招いている。こうした流れに歯止めをかけようと様々な取組みが進められるなか、私たちの地域(旧勢和村)では、地域住民や農業団体など多様な主体が協働し合うことで活力を取り戻しつつある(平成 18 (2006) 年 1 月 1 日に多気町と合併)



【生活を潤す「地域用水」としての立梅用水】



【アジサイの咲く豊かな農村風景】

旧村内には江戸時代の村の地士・西村彦左衛門が完成させた<sup>たちばい</sup>立梅用水がある。現在も山地と平野の間を縫うように流れ、大小様々な水路に枝分かれして民家の庭先を巡り、田畑を潤してから再び櫛田川へと流れ込んでいる。しかし、180 年にわたって人びとの暮らしに役立ってきたこの立梅用水も時代とともに光を失い、たび重なる土地改良工事は、用水を軸に発展してきた村の景色を様変わりさせつつあった。このままでは用水を築いた先人たちの苦労や長きにわたり育まれてきた村の農耕文化が埋もれてしまう。危機感を抱いた地域住民が立ち上がり、立梅用水の歴史と意義を後世に伝えていく努力が 15 年近く前に始まった。

「幸せとは何か。地域に生きるとはどういうことか。そして地域資源とは―」

「地域資源とはまずそこに住む人びとのためのもの。自分が生まれ育った地域にこんなすばらしい資源があって、それを軸に結びつく人びとがいて。幸せだなと本当に思える…」

日々の生活のなかに、こんな思いをみんなで享受できる地域社会のあり方を考えてみたい。

## 「あじさい一万本運動」の始まり

「あじさい一万本運動」が始まったのは平成 5 (1993) 年のこと。事の発端は、昭和 63 (1988) 年に始まった立梅用水の第二期工事までさかのぼる。将来にわたって工事の受益者負担を背負うことになる若い世代が、実は立梅用水についてほとんど知らないことがわかったのだ。

「このままでいけない。今一度、立梅用水の歴史や意義を皆で共有しなければ」ということになった。そこで文化祭で立梅用水の歴史を P R したり保全活動の啓発を行ったりしたが、大きな取組みにはつながっていかなかった。



【地域で開催される「アジサイワークショップ」】



【休耕田を活用したアジサイの育苗作業】

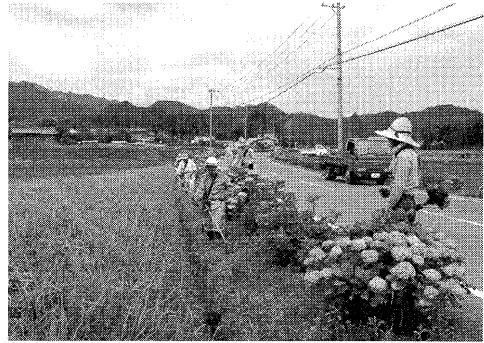
そんな時、丹生地区に「ふれあいの館」という交流施設が建設されることになり、運営を任された当時の自治会長から「丹生には御大師様(丹生大師)があるが、もっと人が集まるように館周辺にアジサイを植えたい」との相談を立梅用水土地改良区が受けた。それを聞いて思い浮かんだのは、

コンクリート施工され、むきだしとなった立梅用水の法面だった。そこで、「どうせなら立梅用水沿いにもアジサイを植えてもらえないか」と持ちかけたところ、自治会長は快く引き受けてくれ、ボランティアを集めてやってみたいと言われた。「皆でやるなら目標をたてたほうが達成感を味わえる。年月はどれだけかかってでもいいから地域で一万本植えようじゃないか」と。

さっそく、アジサイの苗木を育ててもらよう、住民に呼びかけた。里親家庭で根付いた株は翌2月に休耕田へ移し、大きく育った株から水路沿いなどに植栽を行なった。年月はかかったが、平成13年にはとうとう一万本に達した。



【立梅用水管理道路へ子どもたちとアジサイを植栽】



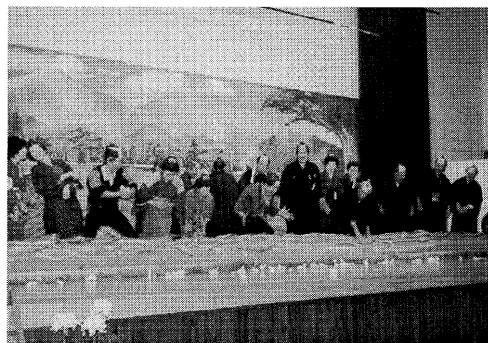
【ボランティアが行なうアジサイの下草刈り】

### 「あじさい一万本運動」から広がった地域づくり活動

人間というのは不思議なもので、自分で植えたアジサイ見ているといろんなアイデアが浮かんでくる。アジサイを育てる休耕田があるなら、他の休耕田でも何か出来るんじゃないかと考えた。それが今の「農村のビオトープ」(通称メダカ池)である。荒れた休耕田を復田し水を張ってホテイアオイを植えたら、昔ながらのメダカや水生昆虫が戻ってきた。ビオトープは、夏休みには地元の子どもたちが自然に親しむ場となり、11月まで咲き誇るホテイアオイの花は、地元住民の目を楽しませてくれている。



【生き物がいっぱい「通称・めだか池」】



【村民手づくりの演劇におひねりが飛ぶ】

このホテイアオイにちなんで地域住民による劇団「ほてい葵」も誕生した。立梅用水の創設に尽力した村の地士・西村彦左衛門を取り上げ、「わしらのむらに水がきた!」という劇を上演し、先人達の苦労を再現して見せたのである。初めて知る歴史に涙する人もいたが、この劇が喜ばれる一番の理由は、劇団のメンバーが全員、隣近所の人間だということである。シャイなクリーニング屋のおじさんや、かしこまった学校の先生がどんな演技を見せるのか、みんなそれを楽しみに見に来た。実は、この劇の上演会からも新たな取組みが生まれている。せっかく劇を見に来てくれるのだから、幕間に地元米を使ったにぎり飯をふるまおうということになった。でも、ただのにぎり飯ではかった。劇に登場する地元の地士、西村彦左衛門にちなんで、「これが立梅用水の水を使って栽培した彦左衛門のうまい米です」と言って出した。これが大当たりして、今では立派な特産品に昇格し、土産品や贈答品として喜ばれている。普段から目にしていた米なのに、「彦左衛門のうまい米」という名前(付加価値)をつけただけで何か特別なものになる。今までより、少し自慢げに人に紹介できるようになる。地域資源の活用のヒントは、こういうところにも隠されているように思えた。

## 地域を思う純粋な活動が、外部の人びとの共感を得る

実はおとしの春に突然、伊勢の「おかげ横丁」から電話をもらった。「客足が遠のきがちな梅雨に、勢和村のアジサイを展示させてもらえないか」という相談だった。

しかし私たちは、アジサイを含む「農村景観」全体を楽しんでもらおうと取組んでいたのも、まず鉢植え用の株はなかった。それに、日本有数の観光地である「おかげ横丁」に展示するには、私たちのアジサイは素朴すぎるように思えた。そこで「花屋で珍しい品種や大輪のアジサイをレンタルされてはどうでしょう」と一度はお断りした。

それに対し、「おかげ横丁」の方が言われたのは、「おかげ横丁は、美しいだけの花を並べるつもりはありません。勢和村はアジサイ運動を通じて立梅用水を守る様々な取組みをされている。そうした人びとの『おかげ』、立梅用水の『おかげ』で力いっぱい咲いたアジサイの花を展示させていただきたいんです」と。その言葉を聞いていたく感動した。すぐに村の仲間達に諮ったところ、みんな大喜び。

「休耕田の苗木を鉢あげしては？」「アジサイの里親家庭にはいくつか鉢植えがあるはずだ」。

こうしてかき集めた 120 鉢を「おかげ横丁」に展示させてもらうことになった。それがご縁で昨年も「おかげ横丁」に私たちのあじさいを展示させてもらっている。考えてみると、日本全国はおろか海外からも観光客がどっと押し寄せる「おかげ横丁」。あの通りを占拠して、私たちの取組みを PR させてもらえる。広告費用に換算すればものすごい金額になると思った。

この事例から気付いたことがある。

「おかげ横丁」が、自分のほうから「私たちの活動を評価し、こんなふうに使いたい」と企画を持ちかけてくれたわけだが、実際のところ、私たちがビオトープをつくり、癒しを与えてくれるアジサイを植え、演劇を通じ立梅用水の歴史を将来へ語り継いでいこうとするのは、他でもない「ここに住んでいる私たち自身のため」である。観光客を呼び込むためのイベントよりも、自分たちの地域を思う純粋な活動こそが、外部の人びとの共感を得、村に人びとをひきつける一番の近道だったのだ。外部に向けて何を情報発信していけばいいのかを考えさせられるいい事例となった。



【住民で構成する「あじさいいっぱい運動協議会」】



【伊勢「おかげ横丁」でのあじさい展示】

## ソフトあつてのハード… もともとそこにあるものに光をあてる

「農業用水」ということばがよく使われるが、本来の立梅用水は、農業だけでなく、人びとが野菜や衣類を洗い、子どもが水環境に親しみ、いざというときには消火に使うといった地域に密着した「地域用水」だった。農業を基盤とした地域経済は各地で低迷し、大きな借金を抱えて実施した土地改良事業の意義が問われる時代になった。そこで、農業用水を再度「地域用水」として復活させようという農水省の事業がスタートした。

立梅用水もこの事業の認定を受けているが、全国から「立梅用水では地域が一丸となってソフト事業に取り組んでいる。ぜひ視察させてほしい」と多くの人に来ていただいている。皆さんの悩みは同じで、「ハード事業は進められるが、ソフト事業のほうをどうやって立ち上げたらいいのかわからない」――。

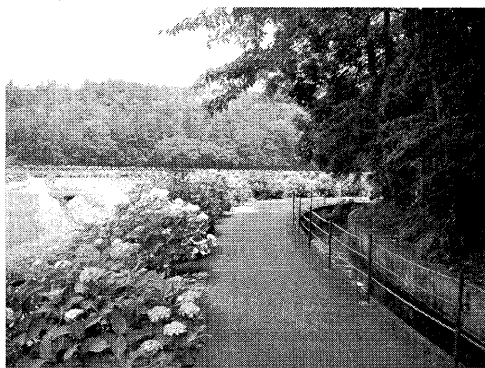
ある県に視察に行った時のこと。膨大な予算をかけて農業用水を暗渠化し、公園や遊歩道として整備された場所に案内された。でも、辺りには人っ子一人いない、もったいない話である。

そもそも地域用水とは、昔から地域住民と共にあったもの。そうした用水の歴史や地域住民の思いなどを無視して、ハード事業を先行させたところに問題があるのだと思う。見た目は立派な施設なのに、地域とのつながりは完全に切れている。

その点、私たちは違った。昭和 63 (1988) 年前後から立梅用水の意義について話し合いを重ね、

平成5(1993)年に「あじさい一万本運動」という具体的な活動に着手し、その後も多くの人びとを巻き込みながら取組みを続けてきた。農林水産省の認定を受けた時には、すでに土壌が形成されていたので、丹生地区内にとどまっていたアジサイの植栽を、立梅用水全域に広げるというソフト事業にすぐ取り組むことが出来た。毎年アジサイ植栽活動を続け、今年も2月19日に約150人のボランティアが集まって13年目となるアジサイ植栽を行なった。

平成20(2008)年頃には、あじさいに彩られた日本一長い「地域用水」としてデビューできると皆で期待している。



【東海美の里百選「あじさいの咲く立梅用水」】



【「あじさいの小径」を楽しむ大勢の来訪者】

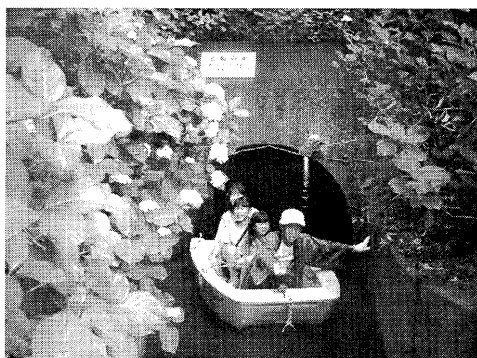
### 意見のぶつかり合い・活動のこだわり・コミュニティの再構築

実は、農村景観づくりや地域資源の保全・活用などという話を持ち出した時、「改良区が何をやっている。改良区は農業用水の管理だけをすればよい」という批判の声もあった。いろんな意見があるのは当然だが、何度も頼みに行き頭を下げて「何とかお願いしたい、資源保全につながるはず」と伝え続けた。仲間だけでやってしまえば話は早い。しかし、言葉は悪いかも知れないが、できるだけ多くの人の手をわずらわせることにもこだわった。その手段として、「あじさい一万本運動」は本当にいい取組みだった。

まず、花というアイデアが良かった。花が嫌いな人間なんてそうそういないはず。それに挿し木や植栽といったボランティアも、スコップ一本あれば誰でも参加できる手軽なボランティアも良かった。自分が植えたアジサイが咲けば素直にうれしいし、梅雨の季節には友人や縁者を招いて自分の地域を自慢したくもなる。

「あじさいいっぱい運動」に始まる様々な取組みは、農村コミュニティの本質である「助け合う心」を思い出させてくれ、地域に対する人びとの誇りや愛着を取り戻してくれたこと。また、「協働」をさせていただいた水土里ネット立梅用水にとっても、用水の地域資源としての価値やその多面的機能、それを直接管理している水土里ネットの役割が、地域の人たちにとって「分かりやすく」なったことは大きな成果である。

そして、みんなが地域資源を享受しながら少しずつ成長していることを感じる。



【立梅用水ボートくだりに子どもたちは大喜び】



【あじさい祭りに行なわれる「田んぼの綱引き」】